

NEWS

女流画家協会 会報

2020.12 Vol. 9

■With Corona どう過ごしていますか？
特集 丸木スマの世界



丸木スマ 「白い鳥」 1952年第6回女流画家協会展
原爆の図丸木美術館蔵

特集 丸木スマの世界

原爆の図丸木美術館
〒355-0076 埼玉県東松山市下唐子 1401
Tel : 0493-22-3266 marukigallery.jp

丸木スマという画家を知っていますか？

若い方はご存じないかもしれませんが、ベテランの方々には懐かしい名前だと思います。女流画家協会の元会員であり、名簿では物故会員の一番上に記載されています。

今回、会報 Vol.9 では、魅力ある人物のクローズアップとして丸木スマを取り上げることになり、まだ暑さの残る 9 月 8 日、取材のため原爆の図丸木美術館を訪れました。

丸木美術館は埼玉県東松山市の都幾川沿いにあります。この地にスマの息子である丸木位里とその妻丸木俊が「原爆の図」のための美術館を作り、制作の拠点



(丸木美術館外観)

としたのは 1967 年。今回はスマについての取材ですが原爆の図は必見。一般の方ばかりではなく、団体に訪れる学生も多いようです。

さて、受付を通り 2 階への階段を上ると初めて出てくるのがスマの作品です。こじんまりした展示室に位里、俊の小品と共に 9 点が展示されています。どの絵も素朴な表現に微笑ましさを感じます。しかし、じっと見ているとその独特な色遣いと感性に吸い込まれていくようです。話によると、息子夫婦に勧められ 70 歳を過ぎて初めて筆を執ったとか。81 歳で亡くなるまで 700 点以上の絵を残しています。

丸木スマは 1875 年広島生まれ。1945 年 8 月 6 日の原爆投下時は家の中にいて一命をとりとめました。翌年には夫を亡くします。生きる張りを失っていたところに嫁の俊に勧められ、犬、猫、鳥など身近なものを描き始めました。1950 年の第 4 回女流画家協会展に初出品初入選、翌年第 5 回展では中央画材賞を受賞し会員に推挙されます。第 8 回展で日本航空賞を受賞し、亡くなる 1956 年の第 10 回展まで出品。他に再興第 36 回院展 (1951) に初入選、3 年連続入選で院友となっています。なお丸木俊 (旧姓赤松俊子) は第 2 回女流画家協会展から出品している会員です。

丸木スマの絵の魅力について学芸員の岡村幸宣氏に聞きました。

スマさんは人気者

スマさんの絵は丸木美術館を訪れる方たちの中では人気があります。原爆の図もいいがスマさんがいいという人がたくさんいて、その気持ちはよくわかります。こんなふうに世界を見ることが出来て表現することが出来たら、とても楽しいだろうなど感じさせてくれる絵です。絵の約束事から自由、というよりは物事を見る目が学校教育を通して形作られているものから来るものではなく、自己流なのです。ここまで究極の自己流はある種の真実。それが伝わるのが多くの人に魅力を感じさせる理由だと思います。

スマさんの絵は計算されている

スマさんは計算している人です。どういう表現をするとどういう効果があるかスマさん流に計算しているのを感じます。ここに塔の絵があります。最初に刷毛でさっと刷いています。塗り残しとか一切気にしないで大胆に筆を動かして。それが後で木とか塔とか描いていくと風のようにも見えてくる、ただただ素人が描いた絵ではない。描き方が彼女なりに計算されているのです。



No.1 (丸木スマ)



(岡村氏を囲んで)



No.2 (塔)

女流画家協会展、院展に入選

1950年代の初め、日本で初めての大規模なマチス展やピカソ展がありました。今までとは違う絵が入ってきた。当時伝統的な日本画は模索の時期で、技術一辺倒ではない作品が必要だった。スマさんの絵はただポンと入選したのではなく、時代背景がスマさんを求めているのだと思います。女流画家協会展初出品のスマさんの絵は俊さんがこっそり持って行ったのではないかと・・・

一同行した高橋和委員談一

女流では、「この方は素晴らしい！」と、スマさんをすぐ会員にしました。先輩たちは凄いですよ。赤松俊子さん、深沢紅子さん、三岸節子さん等、諸先輩方の眼力が広くて深かったと思います。



(女流画家協会集合写真 前列中央スマさん)



No.3 (第5回女流画家協会展 母猫)



No.4 (第7回女流画家協会展 梅が咲く)



No.5 (再興第37回院展 池の友達)

NHK日曜美術館で紹介される

スマさんの絵が今になっても感動を与え続けているのは、NHKに言わせると日曜美術館が再発見したと(笑)。この番組は1984年に放送され、俊さんがゲストで出演しています。もちろんメディアの影響は大きいですが、取り上げれば皆そうなるわけでもないですから、根強いファンがいらっしやった、ということです。最近大原美術館がスマさんの絵を所蔵していることが分かったのですが、それは柳宗悦が持っていたものらしい。火野葦平旧蔵の絵も北九州市に残っています。

嫁の丸木俊さんについてひとこと

昨年、俊さんの絵が東京国立近代美術館の所蔵となり、コレクション・ハイライトで紹介されました。東京国立近代美術館では女性作家の比率の低さを解消する狙いがあったようです。この「裸婦(解放されゆく人間性)」が描かれたのは日本国憲法が公布された直後の1947年。戦後の解放感を象徴する作品として入ったのは良いことでした。

*1947年は女流画家協会が結成され、第1回展覧会が開催された年でもある。

最後に、一我々はどう生き、どう描くのか—スマさんに学ぶこと

スマさんの絵は、年齢を重ねた人が正直に描くという、とても奥深い絵だと思います。それを読み解くのは実はけっこう難しいのではないのでしょうか。かわいい絵と言われてしまうが、私はもう一步進んだスマさんの世界を読み解きたいという気持ちをずっと持っています。若い人にも知ってもらいたいですよね。

—岡村さん、貴重なお話をありがとうございました。

コロナ禍により世の中の常識が覆されて、一人で過ごす時間が増えました。これは自身の生き方を見直すまたとない機会かもしれません。絵とは・・・?なぜ絵を描くのか・・・?上辺だけでない、絵の本質を求めていくのが我々の仕事だとしたら、誰にも教わず自分の眼で見た世界を正直に描いたスマさん、まさに「真実の絵」を描き続けたスマさんに学ぶところは大きいはずです。

(金谷記)

※写真No.1～No.5は原爆の図丸木美術館蔵

これから

新型コロナ感染拡大防止の為、2020年の女流画家協会展は中止となりました。先の見えない状況ですが2021年には拡大防止策検討の上、開催に向け万全の準備をしております。事務所ではこの世界沈滞時期に会のこれからの深く考える機会が持てたと思っております。委員の先生方の作品を1点協会に収蔵し所有していく事。また地方展の必要性を再確認し、安定した開催に向け準備しております。女性であり絵描きでもある出品者の皆様が安心して所属して頂ける団体として、これからも成長を続ける事と確信しております。

個々ではマスクと手洗い等で身を守っていくしか無い状況ですが、これこそが必至の策です。どうか皆様、お元気で制作に励まれます様お願い致します。

事務所代表 中村智恵美

女流展と所属の春陽の絵はとりあえず完成。最近の気候変動で世界の至る所で水害が起きてます。流されてゆく家の映像が1977年のTVドラマ(岸辺のアルバム)を思い起こして、15号の(浸水するアトリエ)を描きました。続いて、やがて南極の氷が溶けて街や建物は海中に沈んで溶け残った氷塊だけがむなしく海上に浮遊する10号(沈む光景)を描きました。

ステイホーム、密にはなれない日々、見上げる空は毎日違いました。

(生駒 幸子)

コロナで世の中が一瞬に変わり、価値観も少し変わりました。今までの考え、生活を整理して次への支度をしなくては、と思いました。これ以上増やさない、というつもりでしたが、増えています。自分の弱さ、を感じます。5月にスマホを変えました。機能が多く、使いこなすのが大変で世の中の変化のスピードを感じます。これらが絵に出るんだろうな、と思っています。

(松岡 滋子)

展覧会延期又猛暑とコロナ禍で外出を控える等制作時間は例年より充分有り過ぎた故か却って考え過ぎ試行錯誤の末、結局黒く塗り潰し今は又振り出しに戻ってしまった。頭で考える理想の絵に私の技量が追いつかない結果だと気付かされる。一方で女流画家協会に所属してきた

事は、一生を通し研鑽する対象を得、少なからず未熟な私の成長に寄与し、同時に社会に僅かながらも貢献

出来る。改めてそれらの幸運に感謝。

(縣 麻利子)



私は、ランの花を描いています。最初はランの美しさに魅せられて描き始めましたが、描くからには育ててみたいと思いい栽培を試みました。栽培して初めてわかった事があります。それは、ランは熱帯の大木の幹や枝に着生して育つ逞しい花でもあるという事です。大自然の過酷な環境の下で雨風にさらされ逞しく咲く花である事を知り驚きました。多面性を持つランを自分なりに解釈して、これからも描き続けていきたいと思っています。

(森重 和子)

3月末の緊急事態宣言から生活が一変した。不安で私の制作意欲は静止してしまった。そんな状況の中でも黙々と制作できる人が羨ましく感じた。私には、その強さがないと自己嫌悪に陥っていた頃、ひょっこりアマビエが登場した。

いたずらがきのつもりで友人に見せたら欲しいと言われて、知り合いに分けたら随分喜ばれた。人様の役に立てたようで絵描きで良かった。と気を取り直し、キャンバスに向かうことが出来た。アマビエ様々である。

(川口 智美)



コロナの影響が余りにも大きく、早く終わってくれたらと思う日々です。展覧会も中止が続き、なんだかさびしい限りです。そうした中で、今迄あまりやっていなかった小品の手直しを少しやってみました。なかなか思うように出来ませんが、少し乱暴に、少し新しいことをやってみました。なんだかぐちゃぐちゃですが、やらないよりはやってみて良かったと思っています。

(中嶋 紀子)

新型コロナウイルスがあつという間に世界を覆った。不安の中に皆が閉じこもり、出口が見えなくなる。これでは駄目と人々は前へ進もうとしている。私もつぶされることなく菌には真摯に接し、三密は避け、与えられた自由な時間を一考しこれまでに描いた作品を見つめなおし、まだ続く絵筆と共の生活に夢を広げていきたい。

(荒川 英子)

「普通」でない日常が続く毎日。「普通」のありがたさが身に染みる。もう一つは「健康」。運動不足は否めないが、絵を描くことで何とかコロナ鬱とは戦えているようだ。幸い田舎なので、庭や里山で出会う小さな花達を様々な画材で描いてみる。すると何となく、こんな時もアリかな?なんて思えてくる。でもやっぱり早く取まれ、コロナ!です。

(白田志保子)



コロナ禍で、絵に対して意欲がすっかりなくなりました。気分転換に恐る恐る美術館へ行っても、そのときだけ。毎年悩みながらも女流展に出して来たことが、如何に生きていく糧だったかを思い知らされました。いい絵が描きたい。いい絵って何だろうと、ラジオを聴いたり、読書しながらの居眠り、運動と買い物を兼ねた散歩、気の向くままにスケッチブックに絵を描いていきます。搬入日が迫れば、いやでも燃えて頑張ります。

(秋山和佐子)

コロナウイルス蔓延の為、自粛を余儀なくされた。大掃除だ。古い研究部の案内状が出てきた。講師、原光子先生(沢村、馬越先生)事務所、沢村先生方だ。地方から多数作品を持って、直接指導を受けていた。その熱意、迫りに圧倒された。45年後の今、真摯に絵画に向かう皆の姿は変わらず、和やかに楽しく、熱心な先生方の指導を受ける。私もその一員として蝸牛の歩みで参加している。時間の大切さを改めて噛み締めながら・・・。

(小野木たみ子)

現在も世界を席卷するコロナ。4～6月は当方主催の絵画教室、また所属美術団体の年内展覧会は全て中止。しかし“これを充電期間に”とポジティブな考えが浮かび、古くからの友人たちとスカイプで討論を重ね、雑誌のリニューアルに打ち込みました。また、手がけていた絵本の挿絵なども熟考する期間となり、今後は小品の制作もしたいと考えています。現状ではAfter コロナは考えにくく、With コロナでの有効な日常を模索中です。



(山下恵美子)

友人がコロナの影響で、出品している公募展が中止になったと聞いた時、女流展まで中止になるとは思っていませんでした。その後中止の連絡があり、少し気が抜けましたが、出品予定の作品の完成度を高める努力をしておりました。又私は来年3月に個展の予定があり、それに向けて、新しいアイデアや材料などを考えながら毎日絵筆を動かしています。世界中コロナ禍の中で、絵を描く事が出来ることを感謝しながら過ごしております。

(相原 悦子)

「自然界には、鮮やかな色をしているのに決して取り出せない色がある。」生物学者福岡伸一氏の文章の一節です。輝く青色のチョウの青を取り出したいと、翅を細かく砕いていくと黒い粉になってしまう。翅には青の色素がなかったので、色を取り出せなかったのだ。ガラスの薄片の様なものが翅に敷き詰めてあり、ここに光が当たって青い色だけが反射されたのだという。真理を追究する科学者の色の見方は面白い。

(河井 雅江)

『日常が非日常』と一変しての生活で特記することがあれば、唯一、都心へ足が向かなかったことです。情報番組とこの夏の殺人的暑さの内での暮らしに専念していました。これが私には結構落ち着きました。その一方で何かしなければと煽られる心理も働き、思いとは裏腹でモチベーションは揚らず、今になり再出発? 必死、肝に命ずる毎日を過ごしております。

(金井 隆子)

第70回展に入選してから、毎年夢中で絵を描いてきました。今年はコロナ禍の中、外出自粛になりモチーフ探しにも出掛けられず、気持もそぞろで絵に没頭する事が出来ずにいました。夫の家庭菜園の手伝いに気を紛らし、植物の生命力の強さをしみじみと感じながら、この4年間を振り返り、来年に向けて新しい気持ちで絵に向って行こうと思っている今日この頃です。

(渡部 尚子)

齊藤茂吉、与謝野晶子もスペイン風邪に罹ったそうだ。私は「三密」を守ってステイホーム。但し、週1回バスで20分の街へ出かけお気に入りの本屋で本を求め、肉屋、八百屋と買い物をして最後にカフェでコーヒーを楽しみ帰宅する。毎週(金)のことなので街の人達と顔なじみになり皆笑顔で迎えてくれる。やはり人は人が恋しいのだ。筆を持つより本に向き合う時間が多かったコロナ禍の日々だがそろそろもうキャンパスに向きたいと思う。

(香川 ヒサ)

コロナ禍の中、学校の休校、カルチャー講座の休講、企画展や個展の中止等が続くと生活のリズムが崩れ始め、絵の制作にも身が入らず何と軽い鬱状態になってしまいました。私にとって外界から多くの刺激を受け、人との係りの中で絵を制作するという事が大変重要な要素であったのだと再認識しました。コロナが収束しつつある今、今までの生活に感謝しながら再挑戦を誓っているところです。一日も早く正常な日常が戻る事を祈るばかりです。



(加藤 舞子)

想定外の新型コロナ。放射能と同じく目に見えない感染症への不安と恐怖で、思う様な行動もできず、かつてない非日常が続いています。私の絵のテーマの『ストレス』ですが、毎日続くコロナ報道はストレスを増殖し、殊更心に刺さります。しかし例えば秋桜が一輪咲いただけで小さな幸せを見つけた気がします。これから『やまない雨はない』の精神で描いて行けたらと思います。

(田中 美沙)

=旅の思い出=

「ディア・ビーコン」=ディア芸術財団レッジオギャラリー=を訪ねて

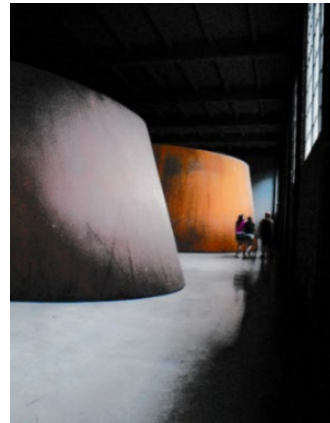
青木 俊子

旅に出ると思わぬ出会いがある。2010年の夏、ニューヨークに住む友人夫妻に誘われ風光明媚なウエスト・ポイントへ行った。そこから、近くに在るディア・ビーコンの広大な現代美術ギャラリーまで足を伸ばした。

ディア芸術財団は、1974年に設立された。この非営利財団は、それまでの美術館では展示できないような、建物に適合する美術作品の長期展示や作品保全を行っていることなどで有名である。また、アメリカ西部、ニューヨーク市、ロングアイランドなど地域限定のプロジェクトや、ニューヨーク市における現代美術展なども支援している。

レッジオギャラリーの名称はこの美術館の実現とコレクションに多大に貢献した、ルイズとレオナルド・レッジオ夫妻に敬意を表して名付けられた。

ディア・ビーコンは、世界で最も優れた現代美術のコレクションを提示している。ニューヨーク州ビーコン市のハドソン川沿いの土手に位置する約8,600坪の施設は、もとはナビスコの包装紙印刷工場であり、現代工業建築の一つのモデルでもあった。



実用的に改修された建物は2003年5月18日にオープンし、現代美術の先進的な理念を提供している。ディア・ビーコンの広大なギャラリーの展示スペースは、約6,700坪で自然採光が取り入れられている。この特性により、展示されている多くの作品は、もはや通常ある建物での展示には順応できない。この美術館は1960年代以降の優れた作家の中で、幅広い作品を紹介している。ベルントとヒラ・ベッヒャー、ヨーゼフ・ボイス、ルイズ・ブルジョワ、ドナルド・ジャッド、河原温、イミ・クネーベル、ゲルハルト・リヒター、アンディ・ウォホルなどである。

今でも忘れられない数々の素晴らしい作品が思い出されます。私の制作の糧として生かしていきたいと思っております。

=個展・グループ展=

未知のコロナウイルスが世界情勢を変え、そして私たちの当たり前であった日常も一瞬で変化してしまいました。現在の厳しい環境の中でも、女流画家協会創立時代の諸先輩方の志を受け継ぐように、所属会員の方々が果敢に作品発表をしております。今回、個展・グループ展を拝見させて頂きました中からご紹介致します。(照山記)

『柴野 純子 個展』

～絵を描くこと～

20年近く両親の介護に明け暮れていた。それまでの価値観が崩れ、生と死に日々向き合った。そのとき心の支えになったのは、やはり絵を描く事であった。作品のテーマも、祈りに変わった。忍耐と無償の愛がなければ介護は出来ない。

今また新型コロナと気候変動により世界中がこれまでとは違う日常を迫られている。無力だがしかし私達には絵を描くという日々がある。こんな時だからこそ絵を描き続け発信し続けたいと思う。

「風」もテーマの一つだ。「風」は聖霊の象徴という事もあるが、全てのものが平等であって欲しいという願望だ。風は毎日吹く。そして、それはどんな場所にも平等に不平等に吹くのだ。ユリ、鍵、月、オリーブ、教会、洗礼堂、ネウマ譜などをモチーフに描く。古い時代のものが好きだ。絵画も音楽もそれらは現代にも通じ、時に新しい。その様な作品を目指したい。

光画廊

2020. 6. 22~27



『高橋 和 展』 -遊びの世界-

ギャラリー・サロンドエス

2020. 7. 21~28

～旅の断片から～

1998年秋、クスコ、プーノを経ての旅はボリビアのティワナコの遺跡で終わった。首都ラパスから遺跡行きのツアーバスを利用して行くのだが、行程の途中で遭遇した余りに静々としたデモ隊には驚かされた。迂回も余儀なくされたが、空とむき出しの大地に気を取られている間に、高度3800mの遺跡群が地平線に姿を見せ始め、キラツク太陽の下、大地と同化していた。文書ではインカ文明に連なる古代文明の一つで、巨大な石の文明とか。古の都市の広場に建つピラコッチヤ神のレリーフを持つ太陽の門、そして月の門の大きな石の面は、精緻に見事に磨き上げられていた。人か半神か、魅力的な立像。半地下の神殿の壁に並ぶ様々の顔は不思議な空気を醸し出している様だった。ラパス最後の日 - 人類の文明の痕跡は地球の傷跡?等と呟きながら、岩だらけの月の谷へも行って見た。



『野村 紀子 個展』 -眩暈-

スルガ台画廊

2020. 8. 3~8

想定し得なかった環境のもと、一日一日を営むようになりました。企画の延期、中止、生活の変容、不要不急への懐疑心、ものをつくることとはいったい。

この度の展示の名は、島田荘司の小説『眩暈』からつけました。この小説は、現実だと思われる世界と夢のような世界を探偵たちが行き来する内容です。ふたつの世界の境には日記が在ります。

日記を跨ぎ世界を反復する『眩暈』の人の他に、J-P・サルトルの『嘔吐』の中で省察を重ね次第にもよおす(吐き気)を知る人や、京極夏彦の『姑獲鳥の夏』で傾斜道を何度も往復するさなかに見えなかったものを認知していく人。この人々にとって、ある行為を「繰り返すこと」とは眩暈をおこすように、世界と自己との間を歪めるまたは深める過程でありました。それが私にとっての制作ではないかと考えるようになりました。



『2 MARU展』

ギャラリー向日葵

2020. 6. 22~28

女流展をはじめ次々と展覧会が中止となり、コロナ禍の中大変な状況での2 MARU 展開催でしたが、インスタグラムによる作品発信やA4サイズにまとめた作品写真紹介紙制作等、今までにない試みをし、勉強させて頂いたグループ展でした。(手塚記)

手塚廣子 「想」 130号

キャンバスに鉛筆、ペン、アクリル絵具、その他諸々の画材を使いモノクロの世界を表現。常に画面を舞台と考え主役、脇役、大道具、小道具等いろいろ試行錯誤しオリジナルワールドを描きたいと思っています。



今井博子 「2020 考」 130号

キャンバスにアクリル絵具と和紙で制作。コロナとの長い闘いが始まった頃、この絵を描き始めました。平常心を保ち制作しているつもりでしたが、展示してみると集中力が不足。これから、大好きな青系の色で、生命力と内容の充実を追究していこうと思います。



『THE REGINA Vol. 3展』

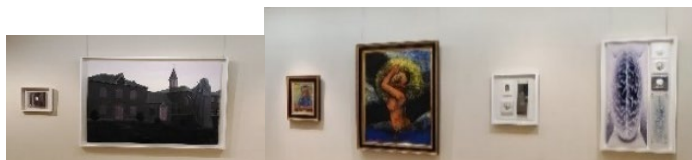
高島屋横浜店 美術画廊

2020. 8. 12~18

2016年に独立美術協会の女性画家たちによる勉強会として発足し、隔年開催で2020年に三回目を迎えました。過去2回は大阪高島屋での開催でしたが、今回から横浜高島屋と大阪高島屋と2か所巡回展示となりました。メンバーのうちに女流画家協会の委員4名を含みます。

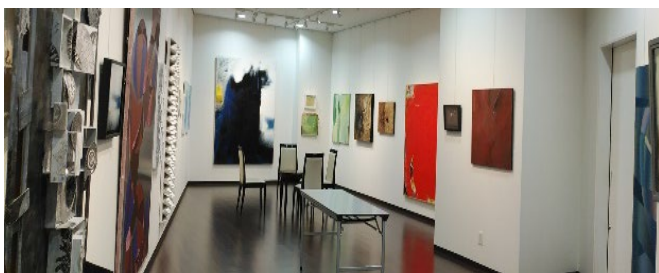
REGINAというのは女王という意味なのですが、「一人一人が一国一城の女王として王道を歩む覚悟」という馬越陽子先生のお言葉を図録巻頭にいただき、自らの制作に立ち向かう展覧会として大事にしていきたいと思っています。

当初の予定では、東京オリンピックとパラリンピックの間の週に横浜展開催となる筈だったのです。コロナ禍で様々なイベントが中止になる中をTHE REGINA Vol. 3展は開催されました。外国人観光客の姿は見かけられませんが、横浜駅前という立地の良さから思ったより人も多く、一時は入場制限も取られたほどでした。しばらく家に閉じこもりざるを得なかった人々が藝術に触れるのを喜びと感じてくださっているようでした。まだ、制限は続くようですが、作品の制作を続け、発表の機会を作っていき、文化の一端を担う気概を持続していきましょう。(須藤記)



2020 女流画家協会 新宿展

コロナ禍で都美術館での本展はもとより地方での展覧会もできない状況が続く中、委員 30 名による 2020 女流画家協会新宿展が実現し、10 月 29 日から 11 月 9 日まで、新宿高層ビル街にある『ヒルトン東京』地下 1 階ヒルトピアアートスクエアで開催されました。



「3密」に気を遣いながらの開催でしたが、100号を超える大作から 50号前後、10号以下 SM の小品まで 66 点のバリエーションに富んだ作品構成で今までの地方展とは一味違う楽しめる展示となりました。詳しくは次号で紹介いたします。(金谷記)

～女流画家協会研究部～ 研究会報告

2020 年は 1 月、2 月(茶話会開催)は通常どおり実施しましたが、コロナの感染拡大によって 3 月から 6 月まで中止とし、都美術館からの要請で定員 25 名になり担当者、モデル、講師の 5 名を除くと部員は 20 名しか受け付けられず、7 月は申込制としました。申し込んだ方も不安を感じたのか、キャンセルも有り、最終的に 10 名(新入会 1 名)の参加となり、辛うじて実施できました。入り口のドアはあけて換気をし、全員マスク着用。通常の三分の一以下の参加者で、自由に好きな場所を確保でき、今回初めて希望のあったムービングもやり、結局今年度は 3 回のみで開催で、年内は休会としました。来年は都美術館が休館にならない限り定員制で実施する予定でいます。(松本記)

研究会担当： 松本恵美 岩井洋子 瀬谷貴久枝

2021 第 74 回女流画家協会展のお知らせ

会期 5月29日(土)～6月4日(金) 東京都美術館
搬入日 5月20日(木) 10:00～16:00 1日のみ



※コロナ禍が収まらない中での開催を想定し、万全の対策をとってまいります。
今年出品できなかった無念さを晴らすべく、力作の出品をお待ちしています。
年に1度 展覧会を楽しみましょう!!



編集後記

ムンクやシーレもスペイン風邪に罹ったらしい。ムンクの「スペイン風邪を引いた自画像」が、某新聞の「逆境から生まれたアート」という欄で紹介されていた。コロナ禍でソーシャルディスタンスを強いられる今、我々もある意味で自己を見つめる良い機会なのかもしれない。(H.T)

女流画家協会 会報
Vol.9-2020.12

発行日：2020年12月15日
発行：女流画家協会
編集委員：金谷ちぐさ、照山ひさ子

女流画家協会 事務所
代表 中村智恵美

〒210-0024
神奈川県川崎市日進町 1-2-307
TEL&FAX：044-272-5200